

事業報告

講座名	こども環境学習講座 「ニホンアワサンゴの調査と周防大島周辺の豊かな海を守るための活動」
日時・ 場所	令和2年12月13日（日）・東和総合センター、なぎさ水族館
参加者数	25名

周防大島南沖で発見された日本最大級のニホンアワサンゴの群生地への調査・保護と海域保全活動の取組について学習し、自然の大切さについての理解を深めるとともに、自然保護活動への関心を高めることを趣旨とした学習講座を開催しましたので、概要を報告します。

《概要》

1 日程

10:30～	開会
10:35～	おはなし「瀬戸内海の環境について学ぶ～アワサンゴの調査・保護活動を通して～」 講師 環境省委嘱自然公園指導員 藤本正明氏
12:00～	昼食・移動
13:30～	なぎさ水族館見学 指導 なぎさ水族館学芸員 内田博陽氏
15:00	閉会

2 おはなし「瀬戸内海の環境について学ぶ～アワサンゴの調査・保護活動を通して～」

講師の藤本正明氏から、以下のような講話を受けました。

- ・講師は、平成18年にニホンアワサンゴ群落と出会い、平成24年には国の調査により、10万個体(3000m²)の群生が確認され、周防大島南沖が世界でも最大規模のきわめて貴重な生息場所であることが解明されたこと
- ・平成25年には、周防大島南沖海域が、景観と資源の保護や研究利用、自然観察などのために、国から、海域公園(国立公園・国定公園内の海に特に指定されるもの)として指定され、県内でも特筆すべき自然財産と認められたこと
- ・ニホンアワサンゴの体は骨格と先に触手があるポリプからできていること、沖縄のテーブルサンゴやエダサンゴと比較してポリプが特に大きく「海の花束」と呼ばれるほど美しい姿をしていること、かつ虫藻と呼ばれる生き物を体内に取り入れて共生しており、かつ虫藻が光合成を行うことで作り出す栄養分を吸収して生きていること
- ・かつ虫藻が活動する適温は10℃～27℃であり、水温が下がる冬はかつ虫藻が体内から逃げて白化現象が起こるが、適温になるとまたかつ虫藻を体内に取り込み元気になりポリプが褐色になること

- ・ニホンアワサンゴの大群生が周防大島南沖に生息した理由としては、①黒潮の潮の流れに乗ってやってきた ②海水温度が上昇し、かつ虫藻が通年で活動しやすい水温になった ③磯やけにより海藻がなくなり、かつ虫藻が光合成をしやすい環境に変化した 等が考えられること
 - ・ニホンアワサンゴは秋に産卵・受精し、20日後にはプラヌラ幼生を放出すること、産卵期には体力が落ちることから毎年秋には大量斃死が起こること、それが今年は異常に大規模に起こり、報道等でも取り上げられたこと、しかしながら、海底では無数の稚サンゴがすでに育っていることを確認しており、5年ぐらいうれば元に戻るものと予想していること
 - ・ニホンアワサンゴを守るために、海底清掃、海岸清掃、アベマキの森づくりに取り組んでいるが、海岸清掃では、広島のカキ養殖で使用されるカキパイプが大量に流れ着いて苦労していること
- さらには、潜水用具の実物を使っての説明もあり、受講者は熱心に聴講しました。

3 なぎさ水族館見学

なぎさ水族館に移動して、ニホンアワサンゴをはじめとする周防大島近海の水生生物についての学習をしました。なぎさ水族館は、小規模ながら地域密着型水族館として、地元の漁師とも協力して、周防大島の水生生物の展示に徹底してこだわり、ニホンアワサンゴの人工飼育にも成功している貴重な施設です。タッチングプールも擁しており、ヒトデやナマコをはじめ大小様々な魚やサメと直に触れ合うことができる魅力的な施設です。

館内では、クイズ形式のワークシートを用いた生き物観察、タッチングプール等で生き物に手や体で直に触れられる展示、手づくり感満載の親しみやすい飼育槽の掲示等、様々な工夫がなされ、こどもたちが時間も忘れて生き物と触れ合い、保護者共々楽しく学習できました。

4 まとめ

30名の募集に対して25名の応募があり、全員参加として対応しました。

新型コロナウイルス感染症対策として、当センターで設定した留意点に従い、安心・安全な講座運営が実施できました（広い講義会場の設定、少人数分散での見学、健康確認票の提出等）

受講者は終始熱心に学習し、自然の大切さについての理解を深めるとともに、自然保護活動への関心を高められた貴重な1日とすることができました。



講義風景



講義風景



なぎさ水族館見学風景



なぎさ水族館見学風景



なぎさ水族館見学風景



ニホンアワサンゴ (なぎさ水族館)